



二つ三つの思ひ出

田山花袋

一

ある年小金井の花を見て、多摩川の上流を探らうと急に思ひ立つた。その時分はまだ汽車がない時分だったので、

そのまゝ歩き出したが、この道路のわるかつたこゝは！

縣道でありながら、三里も四里もの間、人家さういふものは一軒もない。村落もあたりには見えない。従つて休茶屋などもない。それに道には草が生えて、車の轍が深く二列に

なつて何處までも何處までもつゞいてゐるばかりである、東京の近くに、こんなところがあるのかと思つて、そして一日か、つてやつこのこゝで青梅まで行つた、今考へるこゝ丁度あの村山の貯水池のある丘陵の南の原野を歩いて行つてゐたのである。それに、その時には雨が降つて、雲霧が低迷して、そのわびしさと言つたらなかつた。終には泥濘が羽織の上まであがり、草鞋は買ひたくもあたりにそれを賣つてゐるやうな家もなく、人通りがないので拾ひ草鞋もするこゝが出来ず、後には素跣で、半は泣きながらやつこの新町まで行つた。つまり往昔の武藏野はその間に一番多くそのあみをさめてゐたのである、それから思ふに今は開けた、武藏野には電車や汽車が縦横に行つたり來たりするやうになつた、あの路なごは今は何うしたか。全く開けて、その一部は住宅地か何かになつてゐるかも知れない。

二

またある時は〇さいふ友達二人で、多摩の奥の川浦に

いふところから佐野峠を越じて甲斐の猿橋に出た、そしてそこで一夜泊つた。生憎の雨で、躑躅や山吹は美しかつたけれど、道路は全くの泥濘！ それも昔の甲州街道の泥濘！ それを歩いて私達は八王子まで出るこゝにしたが、小佛の峠のこゝまで來るこゝ、もう三時である、八王子までは汽車が出来てゐたが、その最終が四時十分である、その汽車に間に合へば好いが、合はないこゝなるこゝ、汽車賃だけの金しかないのだから、泊るわけに行かない、泊れば汽車には乗れずに明日一日またてくてく泥濘の中を歩かなくてはならない。駈けろ！ 全速力！ で、その峠の上から私達は一目散に走つた。あゝ一時間しかないのに三里の路を突破しやうと言ふのである。それにしてもえらいこゝだ、沿道の人々は皆な目を睜つてゐる。何事かと思つてゐる。私だちの足からは、素草鞋なので赤いものさへ見えてゐる。はねは五尺も六尺も飛んで、走つてゐるものにはわからないが、後から見ると、羽織ばかりが、頭の上、ほんのくぼあたりまでそのはねがあがつてゐる始末である。つ

まり今の高尾山の下から多摩陵の前のあたりを幕地に走つたのである。そしてやつみのこで、その發車の十分前にその八王子の停車場に來るこが出來た。そして互ひに明日また街道の泥濘に惱まされずにすんだこを喜んだ。それにしても雨の街道の泥濘のわるかつたこよ。晴天ならば一日一足で草鞋は間に合つたのに、雨に出會すこ、三里ぐるんで駄目になつて了ふので、一日の旅費の豫定に狂ひを生じて、駄菓子の一つも買へなくなつて了ふのである。それから思ふこ、今は交通が便になつた。

三

紀州の熊野川の沿岸の縣道もひさしいものだつた。これでも縣道かしらと思はれるくらゐだつた。猿の通ふ山路いくらも違つてゐなかつた、それさいふのも熊野川そのものが交通路で、他に道路の必要がなかつたからであらう。その路を學生時代に私は此方にわたり向うにわたりして通つて行つた。

今ではこ、を例の飛行船が溯つて行つてゐる。上のプロペラの音が喧しいので、一時間なら一時間二時間なら二時間、それに乗つたが最後、話も何も出來ないさいふ飛行船が。そしてそれがこの溪山の美しい間を一つは北山川の瀨八町まで、一つは熊野川の本宮までのほつて行つてゐる。そしてそれがこの山中の主なる交通を成してゐる。従つてあの沿岸の縣道は、昔の猿の通る路そのまゝに残されてゐるに違ひない。それを思ふこ不思議な氣がする。

さう言へば、昔こ變つてゐない道路も田舎に行けば、かなり多くあるに相違ない。南伊勢から志摩の濱島に出る路なごも、依然として昔のまゝであるに相違ない。自動車なごもまだ通れないに相違ない。従つてこの中にある風景も未だに世にあらはれずにゐるだらう。押淵峠から見た御座岬の尖端の白砂。蟹港の前に展けられた海。五ヶ所港の静かな灣内。それから南伊勢の長島へこ越えて行く錦浦の峠の上から見た眺望。あゝした海の好景は今だに靜かにそこに置かれたまゝになつてゐるのである。やつぱり無心の

自然にも遇不遇があるのである。

しかし汽車のない時代であればこそ、さうした峻しい山の中も一々拾ふやうにして歩いたのである。今では誰かさうしたもの、ずきをやるものがあらう。汽車で過ぎ行き過ぎ去つて、さういふものに眼をくられるやうなものもなくなつて了つてゐる。さうかと思ふに、たゞその位置が好かつたために、夥しい變遷を見て、昔は別なところかと思はれるくらゐに開けた二見浦のやうなところもあるのである。あの朝熊山の上のたろうやなぎも何かいふ開け方だらう。

四

名古屋の近くにあるあの木曾川の河口あたりも昔は今までは非常に違つてゐるらしい。桑名もさう古い町は思へない。義朝時分は今でも全く別なものになつてゐるに相違ない。否、それよりもあの濃尾平野がまた海であつて、岐阜の金華山あたりまで波が寄せてゐた時分のここがはつ

きりこ指さされるのが面白い。鈔くも昔は關原の狹隘を出て青墓附近の丘陵の裾を縫つて、ずつこ北して、あの美濃の北部の山裾——奥十山おいたんを左に見るやうな地點を交通の幹線としてゐた時代がかなり長い間あつたに相違ない。景行紀あたりを見るに泳宮の逸事がそれを裏書してゐる。それを思ふに、中仙道の開けたのも、歴史に書いてあるものよりも、もつこもつこ古いかも知れない、あの時から始まつたのではなくて、昔からあつたものを修繕して大きな驛遞路にしたのを誤つてさうしたのかも知れない。それにしても、昔の人たちが美濃の奥の山に早く雪の來るのを仰ぎながら、一面に靜かな入江をなしてゐる岸に沿つて、ぐるりこそこをつたつて行つた形が私の興味を惹かずには置かないのである。日本武尊なぎもこの路を通つて熱田に行つたに相違ない。それにつけても、熱田といふところはこの海道山道の最初の地形をしるしづける形に於いて、非常に樞要な地點であつたに相違ない。